

電子書籍化時代の確かな指標

本の内実との懸け橋となる装いをほどこし、書店において読者に選択の手がかりを最初に提供するのが装丁。本書は、思想書としては異例のヒットを記録している柄谷行人著「世界史の構造」などで熱い注目を浴びている気鋭の装丁家による初の単著である。

さん夫妻ら、装丁を担当した著作者たちとの交流録などが書かれている。

手書きによる題字・装画をあしらう装丁によつて鮮やかな光芒を醸出した故田村義也氏から受けた薫陶……。青春期の

なかでも印象深いのは著者の遍歴だ。東京芸術大を受験するも3度失敗。進んだ立教大のゼミでの韓国民主化運動との出会いから手を染めることになるイラストと装丁。ハングルで書かれた、その運動

にかかわる書物の翻訳にも携わった。

さて、「本は物である」という書名は本書の意図を見事に集約している。電子書籍化の大波に襲われ、自明の前提だった書物観がいま揺らいでいるからだ。しかし著者は安易な楽観論にも悲観論にもくみしない。「人間の目で、身体で確認でき、共有でき」

る紙の本のかけがえのなさを踏まえ、「『物である本を残す』明確な意志」を掲げ続けようと、折りに触れて説いているのだ。気骨ある姿勢が潔い。

自作紹介に始まり、幾多の興味尽きないテーマが論じられている。カバーなどの付物

（本の外装部分）印刷や箔押しのような特殊加工の作業現場の報告、あるいは、在野の哲学者として多彩な活動を実践している長谷川宏氏と槇子

高麗隆彦氏と、独自の骨太な

著者は1958年、東京生まれ。装丁家。

高麗隆彦氏と、独自の骨太な

著者は1958年、東京生まれ。装丁家。

著者は1958年、東京生まれ。装丁家。

著者は1958年、東京生まれ。装丁家。



（新曜社、2520円）

